

《総評》

三宅 節子

今年の季題は「燕」「七夕」「西北雨」だった。「燕」は春の季語だが、「子燕」「親燕」だと夏の季語になるし、「燕帰る」「去る燕」は秋の季語となる。選句では春の季語の「燕」に限定せず「親燕」「去る燕」また「燕の巢」なども選ぶこととした。「七夕」は台湾では情人節として定着していることから恋を詠んだ句が多く日本との違いを感じた。「西北雨」は夕立のこと。学生にとっては迷惑な雨のようだ。

雑詠は、春夏秋冬の句があり季語もバラエティーに富んで良かったと思う。

句を読む時は季語の説明になってしまわないように注意したい。季語にはすでに伝統的に定着した意味があるので、その季語に自分の気持ちや感じ方を思い切ってぶつけてみると面白い句になると思う。

《各題優秀句への一言コメント》

《題詠》

第一席「西北雨わが怒り敵倒すまで」

ざあっと降ってきた西北雨、作者はその雨脚以上に強い怒りを内に抱いている。敵が何か明示されていないが、そのことで想像の余白が膨らんだ。二物衝撃の技法が効果的で力強さを感じる句だ。

第二席「七夕や君好きだった紅茶選ぶ」

七夕を恋の句として詠んだ句が多かったが、この句の切なさが一番心に響いた。彼とはもう別れてしまったが作者はまだ彼を忘れられないでいるのだろう。「七夕や」と一旦切ることで、下に続く「君好きだった紅茶選ぶ」に強く引き込まれ切ない思いが伝わってくる。。

第三席「媽祖様にお香三本去るツバメ」

媽祖様は海上の守り神なのでその廟は海辺や河口に向かって建てられている。秋、南方に帰ってゆく燕たちが頻りに媽祖廟の辺りを飛んでいる。まるで燕も道中の安全を祈りに来たようだ。お香三本で人々の拝拝の様子も見えてきた。台湾らしい情景をうまくとらえている。

入選

西北雨窓打つ音がジャズのように
西北雨街路の果てに虹一つ
七夕や一人で歩く夜の街
繁盛の店を見守る燕の巣
西北雨農家のひさし蚊の多く

《雑詠》

第一席「秋時雨九份行きのバスの列」

どんよりとした空から粛々と雨が降る中を九份へ向かう九十九折りの道にバスが列をなしている。映画「悲情城市」とアニメ「千と千尋の神隠し」で一躍観光地となった九份だが、それ以前は金鉱によって栄えやがて衰退した寂しい村だった。九份の歴史と秋時雨の侘しさがよく合っている。

第二席「山越えて我が家が見える星月夜」

山を越えてようやく見えてきた我が家。満天の星空の下に見える我が家には温かい灯が点り家族が待っている。「星月夜」という季語が効果的だ。この季語によって秋の澄んだ空気と満点に輝く星、谷間に見える家々の灯りが幻想的に浮かび上がってくる。

第三席「雪予報陽明山へと車列伸び」

台湾季語の「雪見」がまさにこれだ。強烈な寒波が来ると台湾北部の山にもまれに雪が降る。雪の予報が出るや雪見をしようと車の列が続く。「陽明山」という地名を詠み込んだことで、温暖な台湾で雪に浮かれる人たちと意外と寒い台北の冬を表現できたと思う。

入選

故郷が遠くで呼ぶよ秋の空
冬の夜温もりを知るあなたの手
さざ波に一雫落ち遠花火
蟬の声影の中から響き来る
街路灯通るとき蛾と影重ね